

IATSS三十周年によせて

## IATSS設立三十周年によせて

石井威望 東京大学名誉教授

1954年東京大学医学部、57年同大工学部機械工学科卒業。73年東京大学工学部教授。慶應義塾大学教授、郵政審議会会長、国土審議会会長など歴任。現在、東京大学名誉教授、慶應義塾大学客員教授、東京海上研究所理事長、NTTドコモモバイル社会研究所所長。



### 1. 30年間の変化－エンタングルメント思考誕生への途

この30年間に日本の社会は、モータリゼーション(いわゆるクルマ社会の生活)の定着と、情報化(コンピュータや通信などいわゆるITの常用)という2大変化を“2本柱”として文明史上特筆すべき大飛躍を遂げた。欧米先進諸国の場合には、クルマ社会とIT普及の間に約半世紀の隔たりがあったのに対して、日本の場合にはそれが20年足らずにまで短縮されている。今日、東アジアなどでは、クルマ社会とIT普及がほとんど同時に共存状態としてはじめから存在している。このような経験は20世紀までにはなかった。21世紀には、生活に不可欠の前提としてこの2本柱が普遍的な存在となろう。その結果、一組の箸のようにこの2本柱が不可分にかみ合った(エンタングル: entangle)新しいタイプの生活様式が実現していくに違いない。今までの想像の枠を越えたエンタングルメント(entanglement)生活様式の体験を重ねて行くうちに、やがて独特なエンタングルメント思考誕生に至るものと予想される。

### 2. エンタングルメント思考の誕生と“ケータイ”生活

エンタングルメント思考誕生の予想が的中するか否かは、いかに多数の人々がエンタングルメント生活様式の中で暮らすか、その生活体験の総量に左右される。そのような総量の増大は、必然的に各個人の自主的で多種多様な行動選択の可能性を増大させ、結局各個人間に濃密な相互影響の関係性を生み出し、最終的にはいわゆる自己組織化をもたらす。

そもそもモータリゼーションが、鉄道のような交通システムと本質的に異なる特徴は、自家用乗用車いわゆるマイカーという高速交通手段の個人化(privatization)が圧倒的な比重をもつ点である。これに関連する研究において当学会が果たした役割はきわめて大きい(参考文献:辻村明編著『高速社会と人間』かんき出版、1980)。

完全な個人所有よりやや広い範疇の概念として、各種の専門領域でパーソナル(personal)という用語も使われており、ITにおいては、パーソナル・コンピュータ(personal computer: 略称PC)いわゆるパソコンが1980年代中頃に登場し、1990年代にはインターネットに代表されるネットワークが普及するとともに、PCが相互接続されるのが常識になるという大変革が起こった。ただし、PCで相互にメールを頻繁に打つようになって、確かにネットワーク内で多数の利用者の情報が高速で運動する世界が実現したが、もっぱらデスクトップ型PCの利用とその断続的使用(非使用時は通常オフの状態)という作業様式が常識であり、まだ上述のエンタングルメント生活様式の登場以前の状態であった。

ラップトップ型PC(液晶表示面を持ち超薄型軽量小型)の普及によって、利用者自身の空間的運動つまり携帯化が実現し、エンタングルメントへの原始的段階に辿り着いた。しかし、この段階でもまだマイカーの利用のモードとIT活用のモードとが明らかに分離した生活様式であり、本格的なエンタングルメント思考誕生の条件は満たされていなかった。

20世紀末から21世紀初頭の時点で、ようやくエンタングルメント生活様式を日常的に実感できる環境が生まれた。すなわち、カメラ機能付き携帯電話(略称デジカメ・ケータイ)の本格的普及によって、

ほぼ全員が常時オン状態のケータイを持ち歩くようになり、エンタングルメント思考が根つき出した。